

“こえ” と “おと”

神 部 勉 (物理)

音の実験をするのに無響室という部屋が使われる。その中に入った経験のある人なら、御承知であろうが、初めは気が遠くなるような気がしてくるものである。この部屋の壁は、音の反射の少ない材質のグラスウールなどの楔でおおわれており、さらに外からの音も遮断できるよう、壁も厚く作られている。子供の頃、かくれんぼで押入れの中にかくれた時にも、やはり同じような経験をした憶えがある。押入れも無響室の特性を幾分か持っていると言えるかも知れない。

また無響室の中で声を出してみると、その声は何となく心もとなく聞えるものである。この部屋の中では壁からの反射音はごくわずかで、事実上聞える音は口から直接耳に達する音波か、あるいは声帯から体内を伝わって耳腔に達した音だけであろう。

このような経験は、逆に我々の日常生活がいかに音の波に囲まれているかを教えてくれる。我々

が会話しているとき、相手からの直接の音波だけでなく、周囲の壁や物体からの反射音も同時に聞いており、そこに音の深みを感じていると言えるかもしれない。このことは音楽の演奏会場の構造設計では重要な意味をもっていることであろう。

最近、中国の音響学者と会う機会があった。Acoustics を日本語に訳すと「音響学」であるが、中国では「声学」なのだそうである。音波はあちらでは声波というのであることは、工学部のある先生から教えていただいた。我々の日本語としての感覚では“声”は口から出た音のことになるが、中国では別の意味があるのかもしれない。そう思って語源辞典を調べてみた（漢字の語源、山田勝美著）。

御承知の通り、声は古くは聲であった。これは石製の打楽器である磬（けい）の音を耳で聞くことと関係があり、楽器の音、さらには一般に「耳に聞えてくる音」の意になったとのことである。

ここで聲の中にある耳に御注目いただきたい。これは受信器官であり、日本語で声というときに含まれる発信器官としての口から出る音の意ではない。次に「音」はどうであろうか。これは「言」の下部の口の中に一画を加えて「言」と同じ意味を表した字で、口の中の「一」は舌を表しているのだそうである。音と言の上部は画数は一つ違うが確かに似ているうえ、現代中国の発音でも、音は yin, 言は yan で、やはり似ている。音の方は口から出る「おと」を表している。古書に「声の文（あや）を成せる、これを音という」とあり、「こわね」「うたごえ」の意味だという。我々はど

うやら声や音の語源とは違えて使っているらしい。それでは、やまとことばとしての「おと」はどうであろうか。有名な歌や俳句に、「あききぬとめにはさやかに みえねども かぜのおとにぞ おどろかれぬる」「ふるいけや かわずとびこむみずのおと」などがあるから、おとは「ものおと」

の意味であろう。また「おと」は訪れるの意味もあり、外からやってくるものの意であろう。他方、「こえ（こゑ）」はどうであろうか。「祇園精舎の鐘のこえ」「木を倒す斧のこえ」などとあって、これらも「ものおと」といえようが、こちらは人によってコントロールされた“おと”の意味に解釈される。こえは、人や動物の発するおと、あるいはそれらによって制御されたおとの意であろう。

このようにみえてくると、聲は「おと」と読んでもよかったのではないかと思えてくる。また音は「こわね」かもしれない。音に関しては「ね」の読みが古来あるわけだが、おとは適切ではなかったように思える。

英語の acoustics に対する訳語が、日中で音響学、声学と異なっているのを知って、しろうとながらに調べてみて、あてずっぽうのような見解を並べてみました。